

日中の小学校教師による授業の相互評価の分析

—「ボタン付け」の授業事例をもとに—

魏 曉 敏

(2020年10月5日受理)

Mutual Evaluation of Lessons by Japanese and Chinese Elementary School Teachers
— Based on the “Sewing on a Button” class —

Xiaomin Wei

Abstract: Teachers at Dacheng Elementary School, one of the advanced elementary schools for home economics education in China, are hoping for more effective class improvement along with the acquisition of subject theory and expertise. However, no lesson study has been conducted that compares the contents of home economics classes internationally or captures the details of the lesson reviews of the teachers in order to improve the lesson. The purpose of this study is to elucidate the characteristics of teaching in Japan and China through the analysis of teachers' self-evaluation and mutual evaluation of the “sewing on a button” classes conducted in elementary schools in the two countries. We also invite suggestions on lesson studies in Chinese home economics education and how to discuss lessons in Japanese lesson studies. As a result, teachers from both countries showed various support/empathy points and differences in their reviews. In addition, from the sympathetic description of teaching techniques, teaching plans, and how to ask and instruct, it can be inferred that teachers of both countries recognized each other's teaching ability regardless of their expertise in home economics. On the other hand, differences were observed in their methods of teaching a class, intention to use and selection of teaching materials, and methods of learning evaluation.

Key words: Lesson Study, Japan-China Comparative Study, Elementary School, Sewing on a Button, Peer Evaluation by Teacher

キーワード：授業研究，日中比較，小学校，ボタン付け，教師による相互評価

1. 研究の背景と目的

現在、中国の小・中学校には、家政教育に関する教科は置かれていないが、家政教育を研究する先進的な小学校が存在している（劉 2009，韋 2009）。その一つである浙江省衢州市の大成小学校の教師たちは、自

本論文は、課程博士候補論文を構成する論文の一部として、以下の審査委員により審査を受けた。

審査委員：鈴木明子（主任指導教員），今川真治，
村上かおり

分の生活経験と教育現場の経験をもとに「家政教育」の教科書を作り、独自の校内研究なども行ってきた（貴志・魏 2015）。

しかし、教育実践の蓄積がある日本の家庭科に照らして学習内容の系統性や定着可能性を比較検討した結果、大成小学校における家政教育には、学習内容の精選と内容相互の関連づけに課題がみられた（貴志・魏 2015）。その背景には、教師の養成や研修段階において、家政教育の理論を学び専門性を高める仕組みが十分に整っていないという実態がある。そのため、家政教育の充実を模索している教師集団にとって、教科の理論

や専門性の獲得とともに、より効果的な授業改善が望まれる。

授業改善の方法の一つとして、日本の授業研究の成果が世界的に注目されており、中でも、教師の授業力量の形成のために教師同士で協働してお互いの授業に参加したり、検討し合ったりする校内研修の場を設定することの効果は明らかになっている。小倉ら(2007)は、異なる文化間での授業比較について、「教育者は自分自身の指導法を新鮮な観点で吟味し、反省することができる。また、自国における学習目標を達成するためにどのような指導法が最善か議論を促すことができる」と述べている。これまでに、数学、理科および歴史の授業に関する様々な国際比較研究がなされている(張・香西 2011, 小泉 2010, 渡辺 2003)。また、音楽では、カナダ(小島ら 2007)、韓国(澤田ら 2008)、米国(宮下ら 2009)、ドイツ(中島ら 2010)、英国(松永ら 2011)との授業実践の国際比較研究もみられる。家庭科では、一つの授業について国際会議で意見交換する試みはなされているが(家庭科レッスン・スタディ研究会 2018)、同一教材に着目した授業の国際的な比較研究や、授業当事者の省察(評価)を詳細にとらえた研究は見当たらない。

そこで、本研究では、中国の実践事例校大成小学校の家政教育の授業と、日本の小学校で行われた同一教材の授業に対する双方の授業者の自己評価と相互評価の分析に基づいて、両授業者の授業に対する考え方の違いや特徴を明らかにすることを目的とした。本事例の授業における両授業者の省察を分析することは、大成小学校における家政教育の授業研究に示唆を与え、中国の家政教育研究において、その成果と課題を客観的にとらえる契機になると考える。

2. 研究方法

(1) 対象授業の選定

2005年に開発された大成小学校の家政教育では、日本の家庭科と同じように調理や家事などに関する教材を扱ってきた。それらは、労働教育の日常生活労働および家事労働の考え方に基いて、総合実践活動の自校裁量の中で位置付けた教材である。例えば事例として、「青菜を炒めよう」、「一日家事をしよう」などがある。両国の教育課程や授業目標が異なる中で、同一教材を用いても、その教材観は異なると考えられるが、技能習得に関わる教材は、そのような背景の中でも目標の共通点を見出しやすいと考え、縫製技能の一つであるボタン付けを取り上げた。また、現在大成小学校では家政教育のカリキュラムや学習内容の見直しが進

められており、ボタン付けは、生活に役立つ教材として新たに取り上げられた教材である。日本の小学校の家庭科でも5年生で扱う教材である。技能習得を目標とする共通教材を取り上げることにより、教育課程や文化が異なっても両教師の授業に対する考え方の違いを見出せるのではないかと考え、本研究では、ボタン付けを含む授業を選定した。

(2) 対象授業および授業者

対象授業の概要と授業者の属性を表1に示す。日本の授業は島根大学教育学部附属小学校で2018年11月に行われたもので、家庭科学習の小学校低・中学年での実施可能性を探る実験的授業として4年生を対象に実施された。本授業は、図1のとおり小学校学習指導要領(平成29年告示)の内容B「衣食住の生活」の衣生活の(5)生活を豊かにするための布を用いた製作を対象とした題材で10時間の計画であった。本時は6時間目の「ボタンを丈夫に使いやすく付ける方法を考えよう」の45分の内容であった。日本の授業者T教師は5、6年の家庭科を担当している4年生の学年担任で、教師歴は14年であった。

中国の授業は、浙江省衢州市の大成小学校で2018年9月に行われた。4年生の家政教育年間指導計画の中で新教材「ボタン付け」の効果検討のために40分で実施された(図2)。中国では、小学校でも教科担当制をとっている。中国の授業者L教師は4年生の国語専科で、対象クラスの家政教育の授業も担当し、教師歴は18年であった。

(3) 調査概要と授業評価の項目

調査手順は図3のとおりであった。まず、筆者は日中の授業者のそれぞれの授業を参観し、授業の様子をビデオカメラによって撮影した。授業後に授業の逐語記録を作成して両国語に翻訳した。翻訳作業は日本語

表1 対象授業および授業者

		日本 島根大学教育学部附属小学校	中国 浙江省衢州市大成小学校
対象授業	実施時期	2018年11月	2018年9月
	テーマ	家庭科「ボタンを丈夫に使いやすく付ける方法を考えよう」(6/10時間)	家政教育「ボタン付け」(1/1時間)
	児童	4年生(27名)	4年生(45名)
	授業時間	45分	40分
授業者	専門科	家庭科担当 学年主任	国語専科 学級担任
	教師歴	14年	18年

指 導 計 画 (10 時間)		本時の指導案 (45 分)
	手ぬいを生活に活かそう	ボタン付け
1	安全に楽しくさいほうができるように、道具の使い方を確認しよう。	本時の目標： 日常生活の中でボタンを付ける場所や場面を想起しながら、ボタンの丈夫で使いやすい付け方を理解することができる。
2	手ぬいを生活に活かそう ・どうやったらスムーズに糸通しができるかな。 ・なぜ玉結びと玉どめは必要だろうか。	本時の学習の流れ： 1. 日常生活の中でボタンを用いている布製品を観察する。 2. しっかり付いているボタンと、しっかり付いていないさまざまなボタンを観察し、ボタン付けの課題を見いだす。 3. ボタンの付け方を知り、ボタン付けの練習をする。 4. 本時を振り返る。
3	・なみぬいで布と布をぬい合わせよう。	
4	・なみぬいと半返しぬいと返しぬいは何がちがうかな。	
5	・布の裁ち方のコツをみつけよう。 ・かがりぬいではどこがぬえるだろうか。	
6	・ボタンを丈夫に使いやすく付ける方法を考えよう (本時)	
7	生活に役立つ物を作ろう ・大きさや形を工夫しながら何を作るか考えよう	
8	・どこをどうやってぬえばいいか考えながら作ろう	
9		
10	これまでの学習を振り返り、生活への活かし方を考えよう。	

図1 日本の T 教師の題材指導計画と本時の指導内容

指 導 計 画 (年間指導計画)		「ボタン付け」の指導案 (40 分)
1	民族衣装について	授業の目標： 知識目標：ボタン付けの方法を理解する。 技能目標：ボタン付けができる。 態度目標：実践力を育て、労働の楽しさを体験する。
2	帽子について	指導の要点と難点： 要点：ボタン付けの方法を学び、理解して技能を身に付ける。 難点：ボタン付けの作業の順番を学び、丈夫に付けることができる。
3	靴洗い	授業の展開： 1. 関連ある話題から導入し、課題を示す 2. 教師が示範し、方法を理解する 3. 実技訓練、現場で指導する 4. ボタン文化の学習、知識を広げる 5. コンテストを行い、その場で評価 6. 授業の振り返りとこれからの展望
4	ワードローブを整理しよう	
5	キッチン用品の使い方	
6	健康的な食事	
7	メニューを考えよう	
8	餃子の作り方とゆで方	
9	家の掃除をしよう	
10	美しい教室を装飾しよう	
11	四害を退治する (スズメ・ネズミ・ハエ・カ)	
12	お客様を招待しよう	
13	よい思い出	
14	水の安全性のヒント	
15	観光について	
16	地図が読める	
17	ボタン付け	

図2 中国の L 教師の家政教育年間指導計画と本時の指導内容

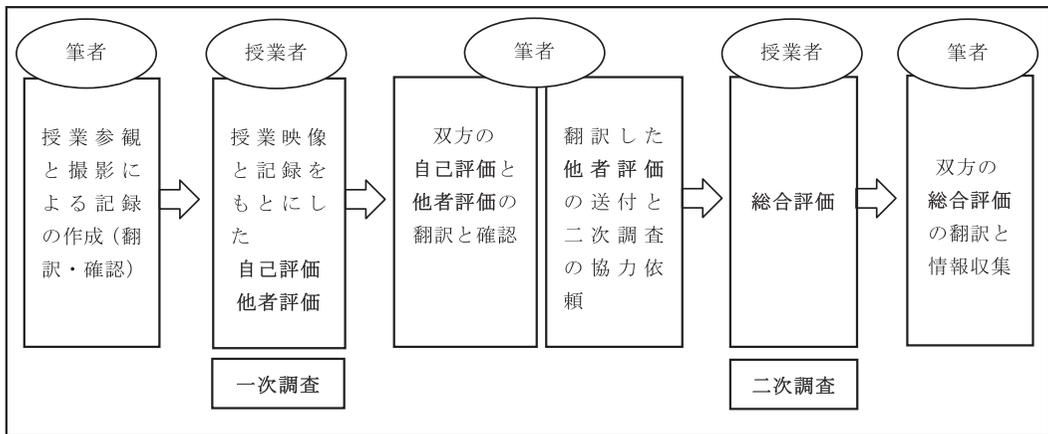


図3 調査手順

能力試験1級をもつ中国人留学生3名と日本人2名で行った。最後に、それぞれの授業者の授業の映像と翻訳した授業記録を合わせて双方に送付し、調査の協力依頼を行った。

次に、両国の授業者は授業の映像と翻訳した授業記録により授業の情報を取得し、一次調査では、まず、自分の授業の自己評価を行い、その後、相手の授業を観て、同じ評価項目で評価を行った。

同じ授業の映像を観ても、評価の視点や基準は人によって異なるため、本調査では評価の項目内容を設定し、これらの枠組みの中で各授業者に自由に記述してもらった。評価項目について、筆者は、稲垣・佐藤(2002)の授業研究の課題と領域の理論を援用し、「教師」、「子供」、「教材」、「教師と子供との関係」、「教師と教材との関係」、「子供と教材との関係」、「環境と教師/子供/教材との関係」の7つの課題領域とそれらの下位項目29項目を設定した(表2)。この授業評価フォーマットを用いて、二人の授業者に対象授業の自己評価と他者評価を記述してもらった。

筆者は一次調査で収集した評価記述データを翻訳した後、相手の評価の記述内容を双方の授業者に送付して二次調査を行った。両国の授業者は、相手の評価の

記述に基づいて、また自分の考えを踏まえて、総合評価を行った。最後に、筆者は総合評価のデータを収集し翻訳作業を行った。

一次調査は2019年3月1日～3月11日、二次調査は2019年4月17日～5月15日に行った。

(4) データの分析方法

表2に示した7領域ごとの各授業者の一次調査における自己評価と相手の授業に対する評価(他者評価)および二次調査における総合評価の記述内容を分析対象とした。ここでは、一次調査で行った他者評価と二次調査での総合評価を合わせて相互評価と捉えることとする。本稿では、相互評価(他者評価と総合評価)の記述内容において相違がみられると捉えた領域に着目して、両授業者の授業に対する考え方を分析した。

まず、自己評価において両授業者の特徴が顕著にみられた領域の内容を抽出し、次に、両授業者の他者評価と総合評価の記述内容を対応させて、双方が支持・共感している内容と、異なる意見がみられる内容を捉えた。その上で、異なる意見がみられる領域の内容を詳細に分析した。

なお、本研究は広島大学教育学研究科の研究倫理審査を受け承認された(承認番号2019035)。

表2 評価項目

課題領域	内容項目
①教師について	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の指導技術 ・教師の身体と言葉
②子供について	<ul style="list-style-type: none"> ・学び合う関係 ・子供の身体と言葉 ・協同学習と個人学習
③教材について	<ul style="list-style-type: none"> ・教育内容・教材の構成 ・単元のデザイン ・カリキュラムの開発
④教師と子供との関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・子供への対応 ・発問と指示の技術 ・個別指導と一斉指導
⑤教師と教材との関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の教材観 ・教師の教育内容に関する理解と知識 ・カリキュラムに関する教師のデザイン ・授業の指導計画
⑥子供と教材との関係について	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の関心 ・学習の過程と段階 ・学習の評価
⑦環境と教師/子供/教材との関係・教室環境の構成について	<ul style="list-style-type: none"> ・教室環境の構成 ・教材、教具の選択と準備 ・ノートや学習資料の活用 ・実習用具の活用 ・観察 ・掲示物と展示物 ・黒板や視聴覚機器の活用 ・教卓・机・椅子・作業台などの配置

出典：稲垣・佐藤(2002)の授業研究の課題と領域の理論を援用し作成

3. 結果と考察

(1) 領域別の自己評価の記述内容

両授業者の一次調査における自己評価には、ビデオ映像の視聴から自己を客観視した記述がみられた。具体的には、日本のT教師の授業の際に児童とのやり取りの中で無駄が多いという反省や、中国のL教師の授業の振り返りで適切な手ぶりと音調が必要であることへの気づきを捉えることができた。両授業者は共に自分の授業スタイルをもち、授業のねらいを達成するため、様々に工夫して、授業を行っていた。

以下に、7つの領域それぞれの下位内容項目において、両授業者の特徴がみられた領域について述べる。

「①教師について」に関して、日本のT教師は授業の中で児童に学習意図を伝えやすくするため、「擬音語や擬態語などの表現を多く使った」と回答した。中国のL教師は、授業に活気をもたらすために、身ぶり手ぶりを使ったり、言葉を豊富に使ったり、児童に明確に指示を出したり、児童に学習意欲や自信を与えるために、励ましの表現をよく使ったりしたと記述した。

「②子供について」では、日本のT教師は、児童の学び合う関係は良好で、個別に教師の支援が必要な児童数名がいたが、個人学習や協同学習は児童自身で進めることができたとして自己評価した。また、児童の発言に個人差はみられたが、児童自身の考えをもって学習に取り組んでいたと記述した。中国のL教師も、児童はそれぞれの学習能力が高く、協同学習の意識もあり、お互いに助け合っていたとして自己評価していた。両授業者とも児童の協同学習の意識と行動を認めていることがみてとれた。

「⑥子供と教材との関係について」では、日本のT教師は知識・技能、意欲や関心など複数の評価可能な場面を設定した。知識・技能は練習時の様子と成果から、意欲や関心は練習後何個付けてもよいと伝え、その活動の様子と成果から、創意工夫は、丈夫にきれ

いに付けるための工夫を考えて発表する場面で評価した。T教師は本時では、ボタンの付け方が分かったかどうかという知識・理解の観点に評価の焦点をあてたと自己評価した。中国のL教師は現場で児童の作品を評価すること(満点10点)、とクラスポイント管理(勉強やマナーのレベルを点数化して定期的に総得点を評価し、学習の動機付けや意欲をもたせる)の評価方法で児童の興味を促したと記述した。L教師は児童がボタンを付けられるかどうか、きれいに付けられるかどうか、家族のために付けるかどうかの3つの観点から評価したほうがよいと考えていた。

(2) 領域別の相互評価の記述内容

次に、両授業者の一次調査での他者評価と二次調査での総合評価の記述を対応させて、相手を支持・共感していると思われる記述内容と、異なる意見がみられる記述内容を表3に示した。

1) 支持・共感している記述内容

各領域において両授業者には、支持・共感を示す記述が多くみられた。例えば、「①教師について」では、日本のT教師は中国のL教師の指導技術に対して、「授業のねらいを達成するため、全体への指導、個別の指導などの手だてがしっかりとされている」と評価した。L教師はT教師の具体的な指導を例として取りあげ、指導が十分にできていると評価した。「④教師と子供の関係について」では、T教師はL教師の一斉指導に対して、「一斉指導でも、児童に問題をなげかけたり、児童から疑問を引き出したりしながら授業が進められていてよかった」と評価した。L教師も「T先生の一斉指導は非常によくできており、児童は先生の指導のもとで素早くボタン付けのコツをつかんだ」と評価した。

2) 異なる意見がみられる記述内容

一方、領域②～⑦では支持・共感する内容とともに異なる意見もあった。本稿では、記述内容において相違がみられると捉えた領域に着目して、両授業者の授

表3 相互評価（一次調査の他者評価と二次調査の総合評価）における項目別の支持・共感点と相違点

課題領域	支持・共感している記述内容	異なる意見がみられる記述内容
①教師について	指導技術・身体と言葉	
②子供について	個人学習・学び合う関係	協同学習
③教材について	カリキュラムの開発	題材学習
④教師と子供の関係について	一斉指導・発問と指示の技術	個別指導
⑤教師と教材の関係について	授業の指導計画	教材観（板書設計と教材の意図）
⑥子供と教材の関係について	学習の関心	学習の評価
⑦環境と教師/子供/教材の関係	教室環境の構成・ 視聴覚機器（ICT）の活用	教材の選択

業に対する考え方を分析する。

表3に示した領域ごとに異なる意見がみられた記述内容について自己評価、他者評価、総合評価毎に表4に詳細に示す。

「②子供について」では、日本のT教師は児童同士が顔や様子を見ながら学習できるように、教室の机の配置はコの字型に並べ、隣同士や小グループで自由に交流することができる学習環境の設定を工夫した。また、児童は必要に応じて席を離れ、友達同士で教え合ったり、黒板の手本を見に行ったりしながら、自分たちで主体的に動いたり、必要な情報を獲得したりすることができるように工夫した。

T教師は「個人学習や協同学習も児童自身で進めることができる」と自己評価した。中国のL教師は児童がボタン付けを練習する際質問があれば席を離れ、教師やほかの児童に相談することができる環境を整えていた。L教師は自己評価において、「授業で児童は協同学習のよさを認め、お互いに助け合っている」と記していた。このように、両授業者は自己評価では児童の協同学習の意義を認めたが、他者評価では、T教師はL教師の授業に対して、練習時に児童が自分の机で集中して取り組める環境を整えられていたことは評価した。しかし、『協同学習』については「手伝うことや、できる人が教えてあげることだけでなく、児童同士、お互いが関係し合って（アイデアを出し合ったり、質問し合ったり）目標を達成しようとする学習だと思っている。本時の学習場面ではそのような協同の場面があまりみられなかったと思う」とコメントした。他方、L教師はT教師の授業に対して、「児童を全体的に自由にさせており、『協同学習』は授業の中では見られない」とコメントした。これらの記述か

ら、両授業者には『協同学習』の考え方に違いがあるのではないかと推察した。二次調査ではL教師は一次調査のT教師のコメントに対して、「T教師の考える協同学習は私の授業では、確かに多くない」と再評価した。L教師は「協同学習はグループやチームの形で児童に学ばせる戦略である」と考えており、日本のT教師は「学級全体で課題を追究する学習」あるいは「個々の課題に応じて、板書を確認したり、友だち同士で相談し合ったりする学習」と考えていた。

「③教材について」では、L教師は、「基礎縫いについての内容に10時間もかけるのは多すぎるのではないかとコメントした。詳しい内容はネット学習を活用して、教師指導とネット学習を併用することを提案した。これに対してT教師は糸通しや玉止め、玉結び、なみぬいができることがボタン付けまでに必要な技能だと考えており、10時間の題材学習を仕組み、「題材全体の導入として、それらの技能の習得に時間を取る方が後の学習がスムーズである」と回答した。また、ネット学習については、知識・理解面では有効だが、技能の定着を図ることは難しいと回答した。一方で、日本のT教師は中国のL教師に題材学習の導入を提案した。これらのことから、両授業者は授業内容の系統性の捉え方に違いがあると考えられる。大成小学校の1時間ごとに区切って行われる家政教育の中では、日本の家庭科のような系統性をもった展開は難しいが、今後指導計画を検討する上で参考にできると考える。近年、児童がコンピュータや情報通信ネットワークを利用して学習活動を行うことがますます重要になっているが、ネット学習に向けた学習内容の判断、適切な学習教材の選択においては両授業者の考え方が異なると考えられる。

表4 異なる意見がみられる記述内容（領域②～⑦）

領域	教師	一次調査		二次調査
		自己評価	他者評価 注)	総合評価
			相互評価	
② 子供 について	L	授業で児童に協同学習のよさを認め、お互いに助け合っています。	協同学習という意味では、児童同士、お互いが関係し合って（アイデアを出し合ったり、質問し合ったり）目標を達成しようとする学習だと思っています。本時の学習の場面では協同の場面があまりなかったと思います。	協同学習の概念について、わたしはT先生の考え方に賛成です。協同学習はグループやチームの形で児童に学ばせる戦略です。本授業では、児童の協同学習は確かに多くないと思います。……児童が疑問を抱えた場合、チーム内で討論させるべきです。……何か問題があった場合、メンバーたちが話し合って、研究して、目標の達成にやり遂げるようになります。
	T	個人学習や協同学習も児童自身で進めることができます。	児童は全体的に自由になっている。協同学習は授業中に行なわれていません。	協同学習については、……、学級全体で、課題を追求したこと（どうしたらボタンを丈夫に付けられるか）や、ボタン付けの実践の際に、個々の課題に応じて、板書を確認したり、友だち同士で相談し合ったりする環境を設定していることは、協同学習の場といえるのではないかと考えています。

③ 教材について	L	ボタン付けは労働技術科目の内容になっています。	単元(題材)や家庭科の教科の内容の一つとして裁縫のボタン付けの学習が位置づけられていますので、中国でも、そうした視点で実践されれば、より、 <u>教育効果も高まる</u> のではないかと思います。	今現在中国では独自な家庭科の授業がないが、わが校は「労働と技術」という科目を指導計画に含めていない……このような現状から言うと、われわれの授業には <u>系統性が不足している</u> と言えないことはないでしょう。
	T	糸通しや玉どめ、玉結び、なみぬい程度はできることがボタン付けまでに必要なスキルだと考えていますのでそのように単元を組みました。	「手ぬいを生活に活用する」という題材を10の時間に分けて完成する。わたしは個人的には <u>多すぎると</u> 考えている。 ……ネット上で学習することができ、同様に各種の技能を身に付けることができる。教師が授業中に指導すべきのは <u>要点と難点</u> に限っています。 <u>日本の教材の系統性もよく参考になります。</u>	……手ぬいは(本題材は)基礎縫い全体の導入になりますので、……丁寧に指導していきたいところです。……後々の学習がスムーズにいくと考えています。 ……ネット上の学習は知識・理解面では有効だと思いますが、 <u>技能面の定着は、見るだけでは図れません。</u> ……授業で取り上げる内容、指導すべき要点や難点は何なのか、今後もしっかり考えていきたいと思えます。
④ 教師と子供との関係	L	この授業は個別指導と一斉指導を両方使っています。	個別にも児童の課題に応じて丁寧に指導されていたと思います。	
	T	個別に <u>配慮</u> のいる児童いるので、……、 <u>個別指導で最後までついていました。</u>	困った児童にも先生は個別指導を与えた。 …… <u>個別の児童に注目してしまうと、ほかの児童に割る時間が少なくなってしまうので、これをいかにうまく時間を配るかは課題</u> です。	……今回個別の指導に時間を要した児童がクラスの中でも特に補助が必要でした。 <u>他の児童は、簡単な声かけや、児童同士の教え合い</u> でどうにかなるとの判断です。 ……
⑤ 教師と教材との関係について	L		……ボタンの文化については前の時間で指導することで、ボタン付けに対する意欲を高めておくことができます。……	……本授業は指導目標が多いので、直接本題に入りました。貴重な時間を技能の学習に費やそうとしたからです。ボタンの種類や文化の内容を枠外の知識として後半の部分で教えるのは、児童の集中力を調整して、常に高い状態に保とうと思ったからです。
	T		板書設計はやや不十分な点がある。 <u>黒板をぎっしり使いすぎて、要点が分かりにくい。できれば主要なもの</u> と補助内容に分けて書いたほうが分かりやすいと思います。	板書については、……板書で大切にしているのは「 <u>児童の考えや言葉</u> 」です。その広がりや深まりを示してこそその板書だと思っています。そうするとごちゃごちゃしてしまいがちですが、 <u>両立を目指して</u> いきたいと思えます。
⑥ 子供と教材との関係について	L	……教師が児童の作品を評価し、クラス管理のポイント(個々へのポイント制)につなげて、児童に技能学習の興味を促します。	ボタン付けコンテストも評価方法の一つだと思います。 <u>速さと正確さの両面が評価できる</u> と思います。日本では、更に興味関心、意欲に対する評価も行います。劉先生は、技能面だけでなく、児童の努力なども価値づける言葉を多く用いておられていいなと思いました。	評価に関しては、……、 <u>評価表を用意して、ボタンをつけることができたかどうか、綺麗に付けたかどうか、家族のためにつけるかどうか</u> などの方面から評価する。……そのような評価はより標準化され、より効果的になるでしょう。……
	T	評価は……布に付けたボタン(知識・技能)、……意欲や関心、丈夫に付けるための工夫の気づきは発表でなど、評価できる学習場面は複数あります。…本時では、……知識面に評価の焦点をあてています。	児童の学習意欲はかなり向上しており……	授業後の個々へのポイント制の取り組みは興味をもって見させてもらいました。日本の学校では、……4年生ぐらから、……ご褒美を少なくし、もらえるから頑張るのではなく、その学習や取り組み自体に <u>価値を見出し、課題を達成した満足感や充実感を感じる</u> ことに重きを置いていきます。
⑦ 環境と教師・子供・教材との関係	L		ボタンの形が2つ穴と4つ穴で混同するので、初めてということであれば、説明はされていましたが、 <u>穴の数を指定するのも方法では</u> 思いました。	四つ穴のボタンがあるのは、枠外の練習として、 <u>能力に余裕のある児童に</u> やってみさせようとするためです。二つ穴のボタンを付ける練習に基づいて、……それを <u>四つ穴のボタンにも活用</u> できます。
	T	児童には、 <u>二つ穴ボタンを用意</u> しました。同じ型のボタンなので、 <u>お互いに教え合う</u> こともできます。	わたしは児童に準備をさせているため、二つ穴のボタンと四つ穴のボタンがあった。これで児童が練習する時に自分の能力で自由にボタンを選ぶことができます。	

注) T教師の一次調査における他者評価はL教師によるものであり、L教師の一次調査における他者評価はT教師によるものである。

「④教師と子供との関係について」では、授業中の個別指導の時間配分に対して、中国のL教師から日本のT教師に「個別の児童を指導する時間が長く、ほかの児童に当てた時間が少なくなっている」と指摘した。これに対して、T教師は二次調査の総合評価の中で「今回個別の指導に時間を要した児童はクラスの中でも特に補助が必要であった。他の児童は、簡単な声かけや、児童同士の教え合いでどうにかなるとの判断」だったと説明した。このように児童への対応に対する解釈の違いがみられた。

表4には示されていないが、発言の仕方について、T教師は一問一答型ではなく、児童の思考が広がったり深まったりすることをねらって、自由な雰囲気の中で児童がこれまでの経験から、様々な角度で考えを発言できるように発問を工夫していた。「児童の動作や言葉も多少調子に乗って表現している部分はあるが、それらの言動も適当な部分ばかりではなく、児童なりの考えや、授業への取り組み方だととらえている」と説明した。L教師の授業では児童が発言する時手を挙げなければならない、指名された児童が自分の考えを発言する時にはほかの児童は耳を傾ける。L教師は、授業では一方的に自分の考えを発言するだけではなく、耳を傾けながら考える習慣を身に付けさせることが大切と考えていた。以上から、両授業者の発問意図の違いがみられた。

「⑤教師と教材との関係について」では、「ボタンの文化」について、日本のT教師は他者評価の中で「ボタンの文化については前の時間で指導することで、ボタン付けに対する意欲を高めておくことができる」と指摘した。中国のL教師は「本授業は目標が多いので、直接本題に入った。貴重な時間を技能の学習に費やそうとしたからであり、ボタンの種類や文化の内容を枠外の知識として後半の部分で教えるのは、児童の集中力を調整して、常に高い状態に保とうと思ったから」と記していた。

「ボタンの文化」の学習の意図について、L教師は集中力の継続のため後半で用いるとし、T教師は導入時の動機づけとして位置付けてはどうかと提案した。このように、教材の使い方に意図の違いがみられた。

また、板書設計について、L教師からT教師に対して、「黒板をぎっしり使いすぎて、要点が分かりにくい」という問題点が指摘された。これに対してT教師は、「児童の考えや言葉の広がりや深まりを示すことが板書に求められる」と考えている。この記述から、中国のL教師は要点と補助内容を分かりやすく板書することを重視し、T教師は児童の考えと言葉を示すことによって、児童自身の思考をたどることが

大切だと考えていることが明らかになった。

「⑥子供と教材との関係について」では、評価方法については、日本のT教師は中国のL教師がボタン付けコンテストで速さと正確さの両面で評価することを認めた。しかし、T教師の授業では、更に興味関心、意欲に対する評価も行うという意見がみられた。この意見を受けて、L教師はもっと詳細な評価表を用意して、ボタンを付けることができたかどうか、綺麗に付けたかどうか、家族のために付けるかどうかなどの方面から標準化すれば、より効果的に評価できると考えるに至った。また、L教師のポイント制の褒美による評価の仕方に対して、T教師は「日本の学校では、4年生ぐらいから、その学習や取り組み自体に自ら価値を見出し、課題を達成したことによる満足感や充実感を感じることに重きを置いていく」とコメントした。以上の記述から両教師の学習評価の仕方に対する考え方の違いがみられた。

「⑦環境と教師/子供/教材との関係について」では、教材の選択に関して、日本のT教師の授業では二つ穴ボタンのみを用意し、同じ型のボタンを扱うことによって、児童がお互いに教え合うこともできていたが、中国のL教師は能力が高く余裕のある児童には新たなことに挑戦させようとするため、二つ穴と四つ穴の二種類を用意し、二つ穴ボタンの練習の後、四つ穴ボタンにも活用できるよう配慮した。以上から両授業者には教材の選択および協同学習の意義の捉え方について考えの違いがみられた。

4. まとめと今後の課題

これまでの授業研究では、一人の教師の授業について詳細に検討することが多かった。今回両授業者はお互いの授業の情報を共有しながら、自己評価と相互評価の内容を通して、様々な共通点を確認した。さらに、自国の文化的枠組みや従来の教授の仕方などを超えて新たな視点から授業を見直すこともできた。

指導技術、指導計画、発問と指示の仕方などに対する支持的記述あるいは共感的記述から、両授業者は家庭科の専門性を問わず、互いの授業の指導力を認めていると推察できた。

一方、授業内容の系統性、教材を使う意図、学習評価の仕方や教材の選択については、両者に考え方の違いがみられた。両国の教育課程において、日本の家庭科と大成小学校の家政教育は、授業の時間数が限られていることは同様の課題である。大成小学校の1時間毎の授業の仕方には授業内容の系統性に課題がみられ、系統性をもつ日本の家庭科には授業内容の絞り方

に課題があると指摘された。学習評価の仕方については、L 教師は技能習得を主たる評価の観点としているが、T 教師は関心・意欲も評価の観点として扱っていた。これは大成小学校の家政教育の評価規準検討において参考になると考えられる。

両授業者の授業に対する考え方の違いには様々な要因があると考えられるが、互いに異なる視点から示唆を得ることが可能である。これからの授業改善のための方策を具体的に考えることが今後の課題である。

【謝辞】

調査にご協力いただきました両校の教師と児童の皆様にご心よりお礼申し上げます。本研究を進めるにあたり、懇切なご指導を賜りました福岡教育大学貴志倫子先生に心から感謝申し上げます。

【付記】

本報告の内容は、日本家庭科教育学会第62回大会(2019)にて発表した。

【引用文献】

- 韋春艶. (2009). 将生活教育搬進校園: 記南寧市埌東小学開設家政課的成功实践. 広西教育, 34, 10.
- 稲垣忠彦・佐藤学. (2002). 授業研究入門. 岩波書店.
- 家庭科レッスン・スタディ研究会. (2018). 家庭科の質的向上を目指して. 国際会議報告書.
- 貴志倫子・魏曉敏. (2015). 中国「総合実践活動」における家政教育: 浙江省大成小学校の取り組み. 日本家庭科教育学会誌, 57(4), 302-310.
- 小倉康・松原静郎. (2007). TIMSS1999理科授業ビデオ研究の結果について. 国立教育政策研究所紀要, 136, 220.

- 小泉友香. (2010). 数学教育における授業の国際比較研究の展開と課題. 筑波大学人間総合科学研究科学校教育専攻学校教育学研究紀要, 第3号, 75-95.
- 小島律子・Anne Hill・仲朋子・坂倉理恵・兼平佳枝. (2007). 音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究(その1) 日本とカナダ国ブリティッシュ・コロンビア州との比較を通して. 学校音楽教育研究, 11, 1-10.
- 澤田篤子・趙泳培・中村美雪・出石智佳子・堀野由. (2008). 音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究(その2) 自国の伝統音楽の扱いをめぐる: 日本と韓国との比較を通して. 学校音楽教育研究, 12, 2-13.
- 張娜・香西武. (2011). 日本と中国の小学校理科授業の比較. 日本科学教育学会研究会研究報告, 26(1), 5-8.
- 中島卓郎・Kramer Oliver・武井紗弥香・川畑啓子・高田奈津子. (2010). 課題研究 音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究(その4) 音楽科の学力育成をめぐる: 日本とドイツベルリン州のカリキュラムの比較を通して. 学校音楽教育研究, 14, 2-16.
- 松永洋介・Jones Richard・楠井晴子・森岡美菜子・山下敦史. (2011). 音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究(その5) 音楽科の学力とその到達目標をめぐる: 日本と英国のカリキュラムの比較を通して. 学校音楽教育研究, 15, 59-73.
- 宮下俊也・大熊信彦・Murphy Scott・斉藤百合子・池上香苗・西園芳信. (2009). 課題研究 音楽科カリキュラムと授業実践の国際比較研究(その3) 批評の扱いをめぐる: 日本と米国カリフォルニア州との比較を通して. 学校音楽教育研究, 13, 2-17.
- 劉莎. (2009). 重慶永川市上遊小学家政教育現状研究. 西南大学(修士論文).
- 渡辺雅子. (2003). 歴史教育における説明スタイルと能力評価: 日米小学校の授業比較. 教育社会学研究, 第73集, 43-63.